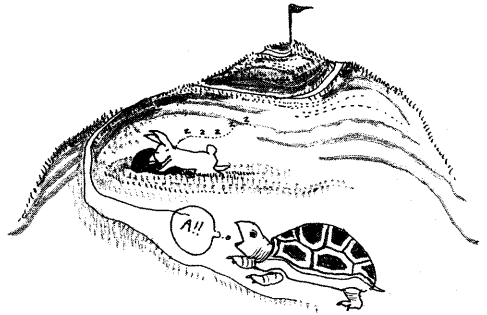


# いろいろな子 いろいろなかかわり



野島 順子



「ちょっとほかのお子さんに比べてかわっているから、先生も最初のうちは驚かれることも多いでしょうけど…。」

遠慮勝ちな、Hのお母さんの初対面のご挨拶だった。

三年生になってクラス替えがあり子ども達も、親も、私も、まだ相手を探りあっているような時期のことだった。Hのことは、前担任の話の中によく登場していたし、私も時折声をかけたことがあるので、多少のことは知っているつもりだった。“かわっている”って、相手の受けとり方や、感じ方に依るところが多いんじゃないかしら…と心の中で言葉を選びつつ、

——Hくんひとりが、かわっていて、他の子ども達がひとまとまりになってかわっていない、というふうな見方はできないですよ。だってひとりひとりとみんな他の子と比べて違うところがあるんだから。いわばひとりひとりの個性というふうに見たいのです。H君ともいろいろな子の中のひとりとしておつき合いしていきたいな。

こんな私の基本姿勢のようなことを、その時お母さんに話したと思う。冒頭のお母さんの言葉には、新しい担任に対する遠慮や多少の警戒の気持ちがあったと思う。

しかしそれ以上に、Hが生まれてから、小学校の二年間をすごすこれまでの間に、“みんなとちがう”と思わざるを得ない、また、まずはそう言わざるを得ない数々の辛い、苦しい経験があつてのことだろうと思うのである。私の側もちろん姿勢は姿勢としても、実際の学校生活の場面では、Hに特別に手をかけたり、個別にかかわったりする場面も多くなるだろうことは予想できた。それはそれとしても、“普通と違う”ということを起点とするような発想は、まず第一番に私の中から払拭しなかった。

お母さんとHが日々直面するであろう困難な現実をもつて、“個性”などという言葉でくくろうとするのはあまりに観念的かもしれない。——でも、いろんな子がいて、いろんなことが起こるのが学級であり、学校であ

り、社会なんですよね。——

実にいろんな子がいて、そしてまたいろいろな、かわり様があるものだと思つづく思う。

\*

初めから、ぼくはどうせ仲間に入れてもらえない；といじけていることが多いIくん。友だちにちょっと気にしていることを言われると、周囲がびっくりするような大声でお返ししたり、ぶつてきたりする。その様子が見たくて、わざとIに口出しする子もいたりする。その子は皆がIにあまり味方しないことを知っている。

Iくんの直さなくてはならないところ、そして周囲の子のIくんの見方やかわり方をもう一度見直すこと等々、話し合いを繰り返している。お母さんは、学校でどんな様子なのかと心配している。家では困ることはないとも言う。

——お母さんに伝える必要があることだったら伝えま

しょう。おうちで家族といい関係でいられるのなら、それでいいじゃないですか。――

確かにIは、家のことを私によく話してくれる。二人の小さな弟達のいたずらを戒めたり、成長ぶりを楽しんでたりする、いいお兄さんであるらしい。帰ってからは、ほとんど家ですぐすということだ。そうか、大人とは、いい関係でいられるのか。それが同年齢の友だちとなると、どうもぎくしゃくしてしまう。これは、お母さんに伝え話し合う必要のあることなのだろう。友達つき合いの楽しさをIにしっかり味わって欲しいもの。

\*

声小さくておとなしくて、友達の限られているJさん。けんかしているところも泣いているところも見ることがない。よく勉強するし、よく働いてくれる。言われたことはみんな聞き入れ、やりとげようと張りつめているように見える。そんなひとりっ子の彼女は、お母さんの心の中の多くの部分を占めているよう

だ。

「こんな子を先生はどう思われますか」ほかのお子さんと違うでしょ。(またしても！)

「ほかのお子さんと言ってもみんなそれぞれだから、ひとまとめにして言えませぬよ。」云々。とひとしきり話し合う。

「お母さんの心配や思いが大きすぎて、Jちゃんが、今の自分の殻からぬけ出せないのではないかな。人に心配や迷惑をかけることはとってもできない子なのですね。彼女が自分から、私達にHELPのサインを出すまで、私達は出番を控えていましょうよ。」

Jが、「○○ちゃん達、私を仲間に入れてくれない」なんてことを私に訴えに来てくれる日を、待っている今日このごろ……。

\*

元気一杯野球少年グループのひとりのK君。遊びたいこと、やりたいことが次から次に出てきて、ついつい、私やお母さんとの約束事を破ってしまう。

「もう今度〇〇したら、〇〇だからね。」と私。「うん、わかった。」と神妙な顔つきでうなづくK。

その健気な反省ぶりについて騙されてしまうのである。水泳の始まった七月の暑い日のこと。Kは用意を忘れて見学するという。それも今年三回目の水泳なのに忘れたのがもう二回目！ 私は頭に来て、主義に反して家に電話して持って来てもらうよう指示する。

「忘れたのは100%あなた本人の責任よ。でも今日はお母さんも一緒におこられてもらいます。」うなだれるK。ところがお母さんは落ち着いた声で、

「今朝話し合ったでしょ。あなたが学校にぬれた水着を置きっぱなしにして昨日帰ってきちゃったから、今日はプールはあきらめましょう、って。なんで電話なんかかけてきたの？」

お母さんのかかわり方も腰が座ったものである。Kに鍛えられているのだろうな。

\*

いろいろな子がいて、いろいろなかかわり様がある。

Hもそのなかのひとり。

初め、Hは皆によく面倒をみてもらい、多少のわがままや特別扱いはHだからと許してもらい、そのことで周囲の子が不満や疑問をもたずに済んでこられたほどに、皆から受け入れられていた。H独特の言いまわしや専門的な知識でもって皆を楽しませてくれることもしばしばだった。子どもたちは低学年であるほど、担任の先生の言うことをよく聞くものである。Hひとりで最後までやらせないといふHの力がかないよ。と、これはクラス替え間もなくの子ども達のHに対する考え方の中心となるものようだった。だから私が、

「早く終わったらHを手伝ってあげてね。」

と軽く言った時、ちょっと戸惑うふうだった。ああ、もう少し柔らかな対応をしてほしい。時と場合によっては、力の余っている子がそうでない子に力を分けてあげたり、困っている子を助けてあげたりすることも大事なことから。世の中で通じる良識が学校では通じないこと

なんかないはずだから……。しばらくすると、子ども達は、私のやり方に直ぐ馴染み、ワッとHのまわりに集まり、Hに教えたり手伝ったりするようになった。時には「あ、これはHひとりですらせようよ。」

と子ども達の好意をおことわりすることもある。また逆に、  
「Hは半分やればいいよ。」などと課題を少なめにする  
と、

「先生、甘いよ、〇〇先生は帰りが遅くなっても最後までやらせたよ。」

と言ってくれたりもする。私も子ども達も出すぎたり、ひっこみすぎたりのかかわり方を繰り返しながら、H自身はニャオンなんてかわいい声で応え（Hは猫が大好きで、時折自分も猫になりきってしまう）友だちの言うことをよく聞いて、課題に向かうのだった。

グループの活動を意識的に多く取り入れた学年だった。学級会と言わず、教科と言わず、よく五〜六人で顔を寄せ合い話し合ったり、作業をしたりした。「友達

話をよく聞き、自分の意見をはっきり言えるようにする。」というような教師側の意図があった訳だが、実際には、大騒ぎになることが多い。中の一人二人が真面目に取り組みその子達の成果が、グループの成果となってしまうこともないとは言えなかった。それでも、友達と協力することはとても大事なのだから、と繰り返し言っていた。聞かせつつ、机の間をあっちこっちとウロウロしていた。

そんな時のHは、やはりどうしても乗れない子の中の一人である。グループの誰かが「Hちゃん！ ちゃんとしな」と呼びもどしては、しばし顔を向けたままよそ見をし、ようやく終わりがこころになるとうまい具合に「Hちゃんこれやって」と手のあいた子がHにできそうな課題を残しておいて一緒にやったりするのだった。Hは、「あ、はいはい、ガタッガタッ」と声と足でリズムをとりながら（Hは、電車博士と言われるほど電車に詳しい。しょっちゅう難しい専門用語を使って私に説明してくれるが、私はほとんど覚えられない?!）見たところい

やがるふうでもない様子で、取り組んでいた。

不思議と、友達に手伝ってもらう方が私が側にいて教えるよりも捗るようだった。何人かの世話好きのやさしい女の子がいて、ついたり離れたりしながらHとかかわっていた。低学年のうちには女の子とよく遊んでもいい。そんなHにも、言わば男のつき合いをする友達もできてきた。先に登場した野球少年Kである。「今日、一緒に遊ぼうぜ。」なんて誘われてHは、「おう、いいよ。」とか時には、「今日はスイミングあるから。」とかポンポンはずんだ調子で受け応えしている。Hがけんかをはじめると、Kはいつの間にか傍に来てHをかかえ込み、「H太（と呼びすてにして）、どうした、やめとけ。」なんて言いながらしずめてくれたりする。興味も違い、生活のリズムも行動範囲も違う二人がどうしてこう引き合うのか。お母さん同士も、「いつもよく遊んでもらって。」とHの母、「いえ、Kは本当にHちゃんを対等の友達と思っているんですから。」とKの母。大人の感覚ではわかりきれない子どもとのつき合いの世界があるのだろうか。

な。

皆に柔らかく受け入れられてすごした一年間だった。もちろん皆にいやがられることもしないではなかったけれど、それも許容範囲の内だった。自分の役割を果たさないことで非難されることもなかった。それほどに心やさしいクラスの面々だった。

変化の兆しは、こんな小事件から始まったように思う。

一日の終わり。帰り仕度のために、教室の後ろにあるロッカーにランドセルを取りに行く。Hが机上の整頓などでもたもたしていると、面倒見のよいLちゃんがHのランドセルを持ってきてくれるのである。ところが、ほんの親切心でやってくれたLの行為が、数人の男子から総攻撃をくらうのである。曰く、

「そんなことしたら、Hのためにならない。Hは自分のことは自分でできる。おせっかいだ!」

と、L本人と数人の男女との激しいやりとりの後、Hが

どう感じているか本人に聞いてみよう、ということになる。そしてHは、要するに「おせっかいです。」と言いつつのである。ほらみる／＼と男子。そんなに悪いことしたわけじゃないのに、と泣き出すしちゃん……。

Lは、そのころ小さなトラブルの積み重ねの中で、数人の男子から心よからず思われていた。男子に対してLを擁護する発言をする数人の女子がいた。彼女らは、普段からHには親切にしてくれている女の子達だった。しかしHは、その時点でのクラスの雰囲気と、同性である男子の言い分というか勢いのようなものを感じとれるほどに、クラスの中に息づいており、そして選びとつたのだった。それは「おせっかい」と言う、今までとは違う、言わば「拒否」の意思表示だった。

たいしたことではないようなことで（と、私には思えるようなことで）、急に騒ぎ出すこのごろのHである。手のひらをペロツとなめて相手の机につけたりする。なだめようといつもやさしい女の子が来てくれると、その

子までぶつたりする。そうになると、Kくんの力も及ばない。中には野次馬もいて、Hを一層怒らせることにもなる。いろいろ周りから言われ、Hも訳がわからなくなるようでも、もうどうにでもしてくれという態度になる。こうなるともう友だちの許容範囲を越えてしまうことにもなってくる。

後ろの席のM君が、さすがに困って私のところに訴えにくる。「あんな時は、しばらくそっとしておくしかないよね。何言ってもだめみたい。」と私も経験上の話をMにしなから、内心、放っておくことは最良の方法ではない、それはHへの無関心、没交渉に果てしなく近づいてゆく方法だから。そうになったら、何にもならないもの。…と考えている。机なめられたら、なめられながらいい方法を考えていこう。そういうMだって、Hと揉み合いながら、「おい、オレの机につぼつけんな。N（隣の女の子）の机につける。」なんて、ちゃっかり咄嗟の機転をきかしてHの気をそらしたりしているじゃない。Nまで巻き込んで…。

いろんな友だちがいて、いろんなつき合い方があるんだよね。Mくん。

先の小事件では「ランドセルを持ってきたのがLじゃなくてOくん（力の強い男の子）だったら、みんなはおせっかいなんて言う？」と問いかけ「人によって態度をかえるのはよくないよ。」と子ども達に印象づけたりしている。

私も言っていることがずいぶん矛盾しているな。

こんなHのこのごろに、どんな対応をしていったらよいか、模索中である。明らかに、Hは変化している。このクラスですごした一年間の中で彼は変化している。この変化がクラスの友だちの中で、納得され受け入れられるような変化になってほしいと念じつつ、しばし手をこまねいたりしているこのごろなのである。

だからと言ってHのことで困っているかと言うとそう

いうことではないのだ。たとえばHと揉み合うMの側から考えれば、HへのかかりそのものがMの成長の度合いを表していることにもなるのだから、一方的なHの変容だけを期待するのではもちろんない。それは、Mにも、Kにも、Lにも、それぞれに期待していききたいことなのだ。

日々の生活の中では、ごちゃごちゃ／＼している内に、／＼なんかこのごろ変わってきたなあ／＼と後から気づくことの方が多いというのが実情だけれど、少なくとも目と頭の中をクリアにし、ひとりひとりの子どもとそのかかわる姿を見据えていきたいものだと考えているのである。

（杉並区立四宮小学校）